座談会 2019

子ども学とは？ 児童学とは？

田代和美
西 隆太朗
浜口順子

「子ども学」「児童学」のイメージ

浜口 「子ども学とは？ 児童学とは？」というのが今日のテーマですが、私の勤めるお茶の水女子大学（以下、お茶大）では2018年度から子ども学コースというのを設けたんです。幼稚園教員養成もするし、資格とは関係なく子どものことを勉強したいという人も学べるところです。文教育学部の中のコースですが、その名称を決めるときに、子ども学か児童学か、議論になりました。「児童学」っていうとちょっと古い感じがするとか、「子ども学」のほうが高校生にはわかりやすいのではないかという意見もありました。講義の時間に何度か学生に聞いてみたことがありますが、僅差で子ども学を推す声が多かった。

田代 ちょっとの差だったのですか？

浜口 それは私も少し意外でした。今は「児童」というと小学生を意味したり、児童福祉法だと18歳未満の子どもが対象だったり。

田代 確かに。児童館とか。

浜口 戦前はもう少し広く、今の「子ども」という意味に近かったのかもしれません。漢字で「子供」と書くことも多かった。元お茶大学長の本田和子氏が、昭和24年にお茶大が東京女子高等師範学校から新制大学になるとき、お茶の水女子大学という平仮名入りの名前にしたのは当時としては新しかったと。平仮名が入ると、学問的でないような、低俗な

田代和美（大妻女子大学教授）　西 隆太朗（ノートルダム清心女子大学准教授）
浜口順子（お茶の水女子大学教授）

感じがするんでしょうね。私は家政学部児童学科出身ですが、他の食物、被服、家庭経営などの学科に比べると、一つだけ人間の呼称？だからか、居心地が悪いような。「育児」なら他と同質なんでしょうけど。大学院に進んでから誰かに専門は何かと聞かれて「児童学」と答えてもすぐにはわかってもらえず、「ジドウ？　自動？」というような顔をされる。それでだんだん「幼児教育です」とか「子どもの発達を」とか言い換えることが多くなりました。

児童研究から児童学へ

浜口　今年（２０１９年）の日本保育学会（以下、保育学会）大会で、「子どもの豊かな保育環境を考える―家政学の視点から」という自主シンポジウムがあり、その２週間後の日本家政学会（以下、家政学会）大会の児童学部会では「子ども学と児童学の関係」を主題としたシンポジウムが企画されました。そこで金田利子先生と田代先生が報告をされて、とても面白かったんです。今日の座談会もそれがきっかけで企画しました。

田代　あの時は児童学の「学としての独自性と家政学における位置」がテーマだったから。児童学そのものとして考えてはいなかった。２０１８年にお茶大のホームカミングデイで友定啓子氏が「お茶の水女子大学と子ども学」のことで講演されたけれど（本誌第１１８巻第２号に記事掲載）、そこから一連の流れがありますね。

浜口　私たち３人は、家政学会の会員（友定氏も）ですが、その中の児童学部会員でもあります。

▲田代和美氏

田代　家政学の中の児童学という流れがある一方で、津守真先生が「子ども学」って名づけたところで、別の光が当たってきたというのがありますよね。

西　津守先生の『子ども学のはじまり』（フレーベル館　1979年）から、ちょうど40年です。当時を振り返った文章の中で、心理学を超えて子どもの世界そのものを研究する分野を考えたかったと言われています（小林登ら編『新しい子ども学2　育てる』海鳴社　1986年）。

田代　「童」という漢字の語源が盲目にした奴隷のことであると知って、なおさら「子ども」のほうが好ましくなったと。

西　倉橋惣三もそれを好んでいたと書かれていますね。

田代　津守真・久保いと・本田和子共著『幼稚園の歴史』（恒星社厚生閣　1959年）のアメリカの幼稚園の歴史の部分で、津守先生はスタンレー・ホールやジョン・デューイを、児童研究の先駆者や児童研究者と書いている。児童学という言葉を、津守先生は使っていなかったんだと思います。

浜口　明治22年に『児童研究』という子どもの教育と心理に関する雑誌が出ます。

田代　スタンレー・ホールやジョン・デューイの児童研究の流れは倉橋らによって伝えられて日本的に変えられたと、津守先生は語っています（前掲『新しい子ども学2』での座談会で）。保育や教育実践とのつながりで捉えるのが児童研究とか児童研究運動で、それは「学」というリジットな学問領域ではなかった。

西　デューイや倉橋など、子どもを尊重する新教育運動から児童研究が展開しましたが、「児童学かくあるべし」が先にあって生まれたものではないですね。

家政学部の児童学

田代　家政学部の中の児童学科は戦後すぐ、1948年に日本女子大学に初めてできました。70年の歴史があります。でも、今の児童学科の先生方が、そもそも児童学とは何かを考えているかといったらそうでもなくて、それぞれの学問領域で教育・研究を行っている。でも対外的には、心理・教育と福祉などいろいろな学問領域から子どものことを学ぶのが児童学だと説明する。

浜口　お茶大の児童学科は1949年にできて、90年代に家政学部が生活科学部に改組すると同時に廃止され、臨床心理系中心の学科になりました。それまでは、発達、教育、法学、文化に加えて医学など他領域の先生がいて学際性あっての児童学だとよく言われ、学生もそういう自覚を強くもっていたと思う。

西　今の日本の大学事情では免許・資格に特化する流れが強くなっています。その中で、単に職能のために学ぶだけでなく、より広い視野から子どもを理解していくための児童学を、どう位置づけるかが課題になっています。国の教員養成カリキュラムにもある程度幅があるとはいえ、やはり思想的・社会的な視点などは外されがちです。大妻女子大学で出された『子ども―児童学からのアプローチ』（相川書房　1998年）は平井信義先生がかかわっておられて、医学的な視点も押さえられていました。

田代　学科創設30周年の記念誌ですね。千羽喜代子先生が児童学について書かれている。

児童学のはじまり

浜口　西先生はどうですか？　子ども学と児童学を比べてみて。

西　「児童学」も由緒正しくていいですね。

田代　本当にそんな感じ。由緒正しい。

西　児童学がその出発点において掲げていた学際的・リベラルアーツ的な視点、子どもを全人的に捉える視点は、とても大切だと思っています。

　それは、今の成果主義的な世の中では見失われがちな視点でもあります。閉じた専門領域の中で子どもの一部分だけを取り出して研究するほうが「成果」を上げやすいし、「専門性」が高そうに見える。だから子どもの研究も、子どもを人として捉えるという大きな視点を欠いた、知識の寄せ集めになりがちです。それだけでは結局、子どもを全体としてどう考えるか、子どもにどう出会うかということは出てこないわけで、学問のあり方としても、子どもにかかわる人を育てる大学のあり方としても、何か大事なもの、根本が欠けている気がします。

「児童学」を冠した学科は女子大学に多いのですが、それも象徴的です。いわゆる男性中心の学問の世界、対象を状況や自分自身から切り離して「科学的」に捉える研究では扱えなかった部分を、女性や女子大学が担って、知として育ててきた歴史があるんじゃないでしょうか。そうした歴史を踏まえると、人間の学としての原点に立ち返る上では、児童学という名前にも意義があるように思います。

浜口　確かに児童学っていうと、その根源とか、淵源をたどりたくなる。

西　一方で「子ども学」という名前には、何か新しいものが生まれて未来に向かっていくイメージがあります。津守先生も「それぞれに子ども学がはじまる」（本誌第92巻第6号1993年）の中で、一人ひとりの心の中に子どもを尊重する知が生まれることを願って

▲西 隆太朗氏

いたという意味のことを言われています。そういう知をどの人もゼロから、子どもと出会う中で育てていく。その時に従来の学問とはちょっと違う、平仮名交じりの「子ども学」っていうのを言われたのでしょう。最終的には、学問の名称そのものが問題なのではなく、全人的な視野だとか、子どもと共に新しくつくる学問だとか、そういったスピリットが大事なのではないかと思います。

田代　新しくゼロから。確かに。なぜか児童学って、子ども学に比べて縛りがある。

西　歴史がいくらか長いですしね。倉橋の児童研究に戻ると、例えば『育ての心』（フレーベル館）には保育者だけでなく、家庭や母親に向けて書いている部分もたくさんありますよね。

浜口　倉橋が研究活動を始め、キャリアを積んでいった時代、つまり明治末から大正にかけての頃について考えると、児童労働や環境破壊による子どもの健康被害に対する危機意識が生じてきたと同時に、児童保護への意識が社会の中で強くなってきました。それと表裏して、児童研究をもとに、子どもを理想化、美化する意識も社会に浸透してくる。家庭では、通勤する父親を支えて家事一切を切り盛りする良妻賢母を育てるための社会教育が盛んとなり、婦人雑誌が多数出版されます。母親とセットで子どもの問題が捉えられるというのが大正時代の流れだったのだと思う。「児童研究」という名の科学的な子ども研究が盛んとなり、倉橋が「児童」の保護に関する論文を多く書き、「幼児」の心理と教育の特質を説き、一人ひとりの「子ども（子供）」の心もちを尊重する文をしたため、「お母様がた」

▲浜口順子氏

の家庭教育の大切さを説く。倉橋の「児童」「子ども」の使い分けにその時代が透けて見えるような気がします。家政学という学問の淵源には、男女の役割分担主義の上に立つ、倉橋の生きた時代の良妻賢母育成という価値観と科学主義のミックスがあって、その中に児童学は出発したという面があると思います。

多様な領域の統合とは

田代　戦前の女子教育において、料理、裁縫、育児などを科学的に教えていた家事科が、戦後、新制大学の家政学部となるのですが、そのプロセスで、家政学が学問として成り立つのか否かが相当問題になったようです。体育も同じようですが。だから学として成立させるために後追いで家政学会ができた。同様に家事の中の育児の領域が児童学科になったので、児童学を定義した上で児童学科をつくったわけではない。だから、児童学として多様な領域を統合する必要があるといっても、具体的に統合するとはどういうことかをイメージできない。家政学もオール家政とかいろいろな領域でまとまりましょうっていうけれど、どういうふうに統合するの？　って。

浜口　一部は、教員養成に特化するっていう流れになるわけですが、西先生の大学はどうなのですか？

西　ノートルダム清心女子大学に児童学科ができたのは１９６４年、今から55年前で、４年制大学としては早いほうになります。初代の学科長は医学者でした。研究分野には心理学、保健・福祉、教育・文化、芸術などがあります。そうした幅広い視野からの子ども理解をもった教師・保育士の養成を続けるのか、それとも学校現場ですぐに役立つ技術のみに特化するのかが、これからの分かれ道になるかもしれません。

先ほど田代先生が、児童学が定義されて児

童学科ができたわけではないと言われたように、こうした学際的な分野がどう統合されるか、明確な共通理解があったのかどうかはわからない。ただ、これらの分野が用意されているのは、人間について、子どもについて学ぶ上ではいい環境ではないかと思います。しかし、多くの「児童学科」では、学際的に学べる環境が用意されている一方、その統合は一人ひとりの学び手に任されてきたのかもしれません。

学者さんが統合を考えるとどうも壮大になる。昔の家政学の本だと、人間が生活する上では幅広い知が必要だから、社会のことも自然科学も医学も、すべて統合した頂点に家政学があるといった構想が描かれていたりする。理屈はともかく、実現可能とは思えない。

津守先生の研究を支えてきた津守房江先生は、お茶大家政学部児童学科の草創期に学ばれています。房江先生の著書には、学問の垣根にとらわれない広がりをもった知が、子どもと出会って生活をつくっていく「私」という一人の人間の中で統合されているのを見ることができます。細分化された領域だけ研究していたのでは出てこない知恵が、そこにある。総合科学としての統合には無理があっても、房江先生のような「生活者としての統合」は可能だし、そのための知が必要なのではないかと思います。

家政学会に児童学部会ができた頃、津守真先生が児童学の総説を書かれています（『家政学雑誌』29巻1号　1978年）。その中で、家政学のように人間の生活を扱う分野では、

生活者が生活者のままで研究者となることも多いことから、自分自身が生活の中で直面する課題から出発する研究が新たに位置づけられるべきだと説かれています。ちょうど『子ども学のはじまり』と同じ頃です。

生活にかかわる知のあり方については、津守先生がこんなことを書かれています。子どもにこれだけの薬を飲ませなさいというのは医師の専門性である。これに対して、薬を飲むことや症状がその子の生活にとってどんな意味をもっているか考えながら、日々の生活を子どもと共につくっていくのが保育の専門性だというのです（『保育者の地平』ミネルヴァ書房　1997年）。けれども、こうした生活に根ざした専門性の意義は忘れられがちで、他の専門性に従属させられることが少なくない。だからこそ、生きた人間にかかわる知の意義をあらためて認識する必要があると思います。

家政学と児童学の関係

西　家政学会児童学部会で田代先生のお話を聞いて、私はうれしかったんです。本当にいいお話を聞けたと思って。

田代　なになに？　どういうところが？

西　一つは、「児童学が対象とする範囲はここまでで、それ以外は児童学ではない」と決める必要はないという、学問に対する自由な見方ですよね。研究者のアイデンティティーが不確かなときにはそうしたナショナリズム的偏狭さに陥りがちですが、そこから解放される気がしました。もう一つは、「児童学とは、子どもの視点で考える学問だ」という先生の考え方です。単なる「研究すべき対象」の次元ではなくて、私たちが共有している視点を言葉にしてくださったんですね。目が開かれる思いがしましたが、先生はどこからそう考えられたんでしょうか。

田代　家政学の研究対象は家庭生活、家事から始まったけれど、今は人間生活における人間と環境の相互作用という広い対象です。だから、研究対象の共有によって家政学を定義することはできない。その一方で家政学は、人類の福祉に貢献するという大きな目的を共有して、生活を、社会を、地球を生活者の視点から見据えることを目指している。今の家政学の状況に鑑みたときに、家政学の中の児童学も、子どもを対象とすることで定義づける必要はないのではないか。子どもを対象とする研究を児童学として定義すると、あなたの研究は子どもを対象としていない、保育者を対象としている研究は児童学じゃありませんとか、閉ざす方向に向かいます。

家政学会の児童学部会シンポジウムの準備のために調べていたら、日本学術会議の「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準」の報告書では、家政学の児童領域とは、子どもが生まれてから自立するまでの期間のより良い保育の在り方を提案することを目標とすると説明されていました。ここでの児童学の捉えは、生み育てる側に立つ育児の流れをくんでいます。でも、それは児童学じゃない、子どもを対象とするのが児童学だと主張して児童学の内部で論争することに意味があるとは思えない。子どもが育てられる存在であることは確かだけれど、その子どもが生活者なのか生活者じゃないのかっていうのが家政学の中において……。

西　明確にされてこなかった。

田代　そう。子どもを、育てられる人としてのみ捉えるのか、育てられる存在ではあるけれど生活の主体者として捉えるのか。そこは生活の主体者として捉えたい。子どもの権利条約を踏まえれば、育てられることも子どもの権利だし。日本家政学会の家政学の定義は、家庭生活を中心とした人間生活における人間

と環境の相互作用について、人的・物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学であるとされている。子どもは生活の主体者であるという立ち位置に立てば、生活の中での子どもと環境の相互作用とか、子育てを含めた子どもをめぐるさまざまな問題を子どもの視点から考えることが、家政学の中の児童学として位置づくのかなと。

西　どんな育児法が良いか、どんな教育方法が効果的か……と言いだすと、生活者としての子どもはどこか視野の外に行ってしまう。そこを取り返していくのが児童学なんですね。

田代　そう考えれば、例えば育児や保育のより良いあり方を検討するときにも、そのあり方は子どもからすればどうなのかと問い直す視点が生じることになる。子どもは生活者だという視点に立つことで、児童学を家政学の中に位置づける意味が生まれるかなと。

西　しかも既存の領域に縛られずに、多様な知を取り入れることができますよね。

田代　でも、家政学を取り払った児童学についてはどう考えたらよいのかわからない。あくまでも家政学の中の児童学という限定付きで考えたので。

統合するということ

浜口　保育学会のシンポジウムで、食物栄養学や被服学や住居学の人とかが話す子どもの研究を聞いて、「生活者として食べる・着る・住む」という視点が強く、昔よりも自然科学

的傾向から人間科学のほうへシフトしているという印象を受けました。とはいえ、依然として数量的な研究が多くて、家政学の中でもその面でディシプリン（学問領域）として市民権を確保している。学生時代、児童学の学徒としては、アイデンティティーが見えなくて、これでいいのかなと自信がもてなかった。

田代　いろいろな学問領域の先生たちから知識や考え方を投げ込まれて、どうしたらいいか。

西　どう消化するかっていうね。

田代　どう統合するか。

浜口　児童学は高尚な目的をもって始まった学問なんだろうけれど、習うほうは大変で。よく知られた普通のディシプリンに属していると楽なんじゃないかと思っていた。

田代　私は児童学科ではなかったけれど、似たようなものですよ。

浜口　障害児教育ですよね？

田代　そう。学部は人間学類だし。医学、心理、教育の三つの学問領域から障害をもつ子どもについて学ぶ学際的なアプローチ。雑誌『児童研究』の中でも統合とかコンプリヘンシブ（総合的）することが必要だと長年言っているんですよね。やっぱりディシプリンとしてまとめたいという。

いろいろをそのまま生かす

西　無理に一つの形に統合しなくてもいいんじゃないでしょうか。

田代　そう思います。今むしろ、新しい学問は「スタディーズ」ですよね。クィア・スタディーズとか、ディスアビリティ・スタディーズとか。

浜口　そうそう。昔はね、児童学も単数形のチャイルド・スタディ。

田代　なんでスタディーズじゃいけないのかなっていう。

浜口　単数（スタディ）だと収れんして統合するイメージだけど、複数形にした途端に拡散していくようなイメージがある。

田代　今、お茶大の子ども学コースは？

浜口　社会学系の人が複数形にしたいということでチャイルド・スタディーズ。おそらく今の学問の流れの中で、ただ学際的という以上の、複数にする意味、多様性自体を学問的方法の強みにしようということかと。統合とか言い過ぎると形式主義になって、死んでいくものがある。もっと拡散とか膨張する中で新しいものが見えてくることもある。私がイメージする子ども学は、やっぱり理系も文系もない、人間学とか生命学とか、なんかそういう枠組みから自由なところで子ども学をやりたいのだと思う。育児の対象じゃなくて、生物として人や子どもを捉えたり、そもそも子どもと大人ってどう違うのか、大人学ってあり得るのかを考えたり。いわゆる子ども理解とか育児、実践的なかかわり、保育者養成という従来通りのテーマも入ってくるけれど、そもそもどうなのだっけと、常識的な発想に疑問符を打つ。家政系、教育系じゃない人も、教職を取らない人も、みんなに子ども学をやってほしい。そうすると世の中全体がもっと、子どもにとって居心地のいい場所になるんじゃないか、職場環境ももう少し育児する人に優しくなるかなと思ったり。

田代　いろいろな位相の研究とかいろいろなアプローチがあってしかるべきだと思うんですよ。津守先生は最終的に直接自分が子どもとかかわって、生活を共にしながら、自分も変化しながら子どもの世界そのものを研究するという方法を生み出した。でもそれはみん

なができることではないし、それじゃないと子ども学じゃないって言われちゃうと。

西　津守先生も、それだけが子ども学だとは思ってなかったと思うんですよね。

田代　そうそう、それ以外は子ども学ではないとは。

西　むしろ、今見えている以上にとても大きくて広い世界なんだと言われていましたね。

田代　マス（集団）で子どもという存在を知ろうとすることや子どもの発達の道筋を知ることももちろん、子どもたちのために必要なことです。直接的にではないけれど、子どもと共にある人がそれらを知っていることで、子どもがより生きやすくなるのであれば、それも児童学なのだと考えたい。研究対象や方法論で縛るよりは、子どもにとって最も善いことを、私たちは子どもではないんだけれども、子どもの視点で考えようとするところでつながれていればいいかなって。息苦しさは子どもの世界にはなじまないし、正直言って私は苦手です。子どもの視点で考えようとするいろいろな人がいることが大切なのかなと。

子どもの視点

西　本当にそうですね、学問の垣根で縛るのではなくて、その根本にある、子どもの視点を共有するところから出発するということですね。学問の垣根を超えるということでは、岩波書店から出た『シリーズ授業』の第10巻、『障害児教育』（１９９１年）が思い浮かびます。

浜口　あれは、愛育養護学校の保育現場における実践の様子を、いろいろな学問分野の研究者や文学者が一緒に見て、その後、保育者（実践者）も加わって自由に語りあう様子が、座談会形式で書かれています。

西　津守先生の保育実践について、臨床心理からは河合隼雄先生、発達は野村庄吾先生、

教育なら佐藤学先生、詩人の谷川俊太郎さんなど、多彩な人たちが集って議論する。一つの方法論だけではなくて、領域は多様なんだけれども、みんながそれぞれに「子どもの視点」をもっていた。野村先生の著書もそうですが、単に発達科学の知識を提供しますという話ではなく、人間学にインスパイアされているというか、内面に子どもの視点があって発言されている感じがします。自分の専門だけじゃなく、マージン（周辺、余地）というんでしょうか、一人ひとりがそういう人間的な広がりをもった視点から子どものことを考えて、話しあえる。ほんの30年ほど前までは、そんな文化が根づいていました。

浜口　今マージンと言われたけれど、どのように育てるかではなくて、子どもを面白がるというか、ひいては「人間って面白いね」というような視点とつながりませんか。子ども学で、子どもの視点には立てても、それを子ども本人から確かめることはできない。子ども学研究は子ども自身が直接の発信者にはならないという特徴がある。だからこそ大人が興味をもつ、面白がるというアプローチが効いてくるというか。寄り添うだけではない近寄り方があるのかなと。大人は自分もかつては子どもだったってことは確かだけど、今そこにいる子どもと同じじゃない。そこの齟齬（そご）というかズレが面白いんじゃないかしら。あの本は、語り手それぞれの興味が違いながら、子どもについて語りあっている。そういうあの本の成り立ち自体が、子ども学の一つの形なのかなと、今のお話を聞いていて、なるほどと思いました。

保育者養成と子ども学

西　今のように一つの目標を短期間に達成して評価するという文化が支配的になると、あまりマージンだとか言っていられなくて、子どもの全体性だとか、領域を超えた人間知の広がりよりも、すぐ目に見える成果だけを追い求めるようになる。そういう文化が、子どもが育つ土壌をやせ細らせている気がしています。そんな時代だからこそ、「効果的な教育技術」といった狭い視野を超えて、児童学的な視点を取り戻していく必要があると感じています。

田代　でも養成でこそ、本当はそこをちゃんとやらなくちゃいけないですよね。それがないと、仕事をしていても、子どもといることの面白さが抜けちゃいますよね。

西　津守先生は、子どもとの生きた接触が失われると、研究が子どもを支配するものになりやすいと指摘しています（「子どもに学ぶ」本誌第73巻第12号　１９７４年）。自分が子どもとどんな出会い方をしてきたかが問われるし、その体験が児童学にとって大事なのではないかと思います。

浜口　先生方の大学では、正式な教育・保育実習に入る前に、ただ自由に遊ぶというような時間を設けていますか？

西　そういう授業も設けています。児童学科以外の学生も含めて幼稚園を訪れるのですが、いつも真摯（しんし）に子どもと出会ってくれるし、「子どもの視点」にどう迫っていくか、一緒に考える体験をしているような気がしています。いつまでも子どもに引っ張られて帰ってこられない様子、毎回の別れを本当に大切にしている様子も、見ていてうれしいですしね。逆に学生が、「こうしたほうが教育的・効果的じゃないか」といった理屈にとらわれ始めると、かえって子どもとの関係が袋小路に入ってし

まうように思います。

浜口　中学生が家庭科で保育所訪問をすると、学校では自分が出せない子が、子どもと出会って普段と違う自分を出すことがよく報告されますね。親性教育とかって。あれも子ども学の本質みたいなところでしょうか。

西　そういう経験こそが、先生になる人にとっても大事だと思うんですよね。

田代　実習中も自分の意図とか自分の今日の目標にばかり縛られている学生もいて、そうすると子どもと全然出会えない。思わず子どもと通じあえたうれしさとか、つながった楽しさとかを感じて帰ってくる人の話は、聞いていてなかなか面白いんです。

浜口　そこの垣根が高い子もいますよね。

田代　そうなんです。楽しさがわからないだろうなって。目的なく出会うっていうか、人として出会うっていう経験ができたらいい。子どもとして入れてもらう経験をさせたいなとも思います。保育者として入るんじゃなくて。

浜口　お姉さんみたいな？

田代　お姉さんじゃない。本当に5歳児として。年長さんクラスあたりで。

西　そんなふうに、何の分け隔てもなく子どもの世界に入っていける才能がある人もいますね。心の壁をつくらずに人とつきあえる姿勢には、こちらも教えられる気がします。

田代　面白くてなかなか遊びを切り上げられない子どもたちと一緒に過ごしていると、他の人たちはホールに移動してしまっていて、その子たちと一緒にホールから締め出されることがある。そういうときの子どもの反応がすごく面白くって。

浜口　それって、子どもの目線まで下りてい

って子どもになるというより、間違いなく大人でありながら、大人として生きている素というか、普段抑制している表情とか弱いところとかをポロリと出してしまっているとも言えると思うんです。そうすると子どもは沸き立つように喜ぶ。「童心に帰る」というのとはちょっと違う。

田代　だから、日案も大事だけど、人と人として出会うっていうことをまず経験してほしい。小学校の先生になりたい学生は、保育者志望の人よりも一層、いかに子どもたちをまとめて、いかに自分の指示を通せるようにするかを目指して入ってきちゃうので。それこそ、人として出会うっていう発想がそもそもない。

浜口　小学校でも中学校でも高校の先生になるにしても、そこの部分は欠かせない。でも実際はいきなり指導法から入ってしまう。

田代　初年度からそういう専門の授業が始まってしまうので。でも保育者志望の学生も、違うのは言葉の使い方だけかもしれない。「子どもの目線に立って」とか言うんだけど、現実的にどうかかわっているかは……。

西　実習はどの人も真剣に取り組むんですが、そこから何を学ぶかですね。子どもと真摯に出会って、共に成長した体験を実習後に聞かせてもらうことは多くありますが、まれに「子どもを動かせた」という達成感のほうに引きずられて、「させる保育」のほうに専門性とやりがいを求め始める場合もあります。

浜口　子どもとうまくかかわれなかったとか、意外なことが起こってびっくりしたという体験を、プラスに前向きに考えていくことこそ大事なんだと思います。

田代　その辺りが、子ども学とか児童学の視点なのに、養成科目の中にはない。なくなってしまった。

西　独立した科目としてはほぼないですね。

入れ込めるとすれば「幼児理解」でしょうか。

田代　根本的な、ベースの部分っていうのが。

西　各科目で意識的にやらないと、その根本の部分が実質的に排除されてしまいますね。

田代　児童学や子ども学は、養成課程の中にもうまく収まらないっていう。

浜口　子ども学が授業名に入ると、曖昧なイメージがあるから何でもできる。

田代　何でもできる自由度の高い科目というのが今の養成課程では難しい。

浜口　近所の公園やお店などに出かけて行って子どもや親子を観察するとか、そういう時間をとりたい。大正から昭和にかけて園長だった倉橋惣三が、園の先生たちを連れて、デパートの特別展示会とか、美術館とか演劇などに行ったというけれど、今でいう現職研修ですよね。園の外の社会を見ること、美しいもの面白いものを見て感じる感性を大事にして育てようとしていた。これも、子ども学なのかもしれませんね。

（2019年7月30日　お茶大にて）